

四十九 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その一

私は認識論へのカントの貢献を根本的なものと確信している、

しかし、まさに決定的なものと考えている。 一九六三年、カール・ポパー

園丁 めったに夢を見ることはないのに、今日は初夢を見て、こうしてあなたに会うことができました。どうかすぐに消え去らないで、しばらくでもわたしと話をしてください。めでたい正月がなにごともなく終わってしまわないように。

莊周 わたしも久しぶりに君に会えてうれしい。新年の喜びを分かち合いたいものです。どんな話をしましょうか。

園丁 僕は、認識とか言語とかいうものについて思索を巡らせてみたいのですが。

莊周 いきなりむずかしいことを言い出したものですね。

園丁 はい、認識について考えた哲人の書いたものを二つ三つ読んで、ときどきそれを反芻していたのですが、最近、言葉を認識にまで結びつけて考えた三浦つとむという人の書物によってまた思索を促されたのです。あなたは夢見る蝶ということですが、夢とい

えば、夢を見る者と夢に現われるもの、いずれも認識に関わるわけですから、このことについて対話をするのにふさわしいと思います。

莊周 ああ、そうですか。でも、わたしは君の夢に現われた蝶にすぎないのでから、二人が話をして、君が考えることのできる以上のことを思いつくことはできないでしょう。蝶が幼虫のときなら何かを紡ぎ出せたかもしれないけれど。

園丁 しかし莊周さん、あなたは翅のない蝶を思い浮かべたのではないでしょう。その方が夢を紡ぐのに似合いの姿だとしても、飛べないのでは、人がはかなくも夢のある願望を寄せるのに向いていません。僕は莊周さんの夢に登場するのですから、僕たちの対話はあなたの高みに少しは近づけませんか。ギリシアの哲人は、問答によって考察を深め思索を高めようしました。東洋でも禅門では問答が考えを深める方法でした。そして三浦つとむさんは、唯物弁証法で認識と言語を論じました。弁証法はギリシア人の問答法から発展したのですから、この問題をあなたとの対話で考えてみるのは悪いやり方ではないと思います。もつとも、あなたの言われるようにあなたが僕のはかない夢に出る蝶にすぎないとすれば、大したことはできないでしょうが。

莊周 そうですか、君のせつかくの夢をぶち壊してもいけませんから、ともかくお相手をしてみましょう。 独白、「どうなることやら」

A 感性が対象と交わって対象を直観するやり方

園丁 まず、人はどうやって認識するのかを考えたいと思います。三浦さんは、言語を認識から表現に至るまでの過程として論じました。でもそこでは、認識の過程はそれほど説明されていません。僕にはそれが不満なのです。僕の乏しい知識からすると、認識を分析して構造的にそれを構成して見せたのはカントです。それが近代的な認識論の始まりだと思います。ところが、三浦さんは、マルクス・エンゲルスの唯物論者で、カントには観念論への逸脱があると見なします。すなわち、カントは「空間や時間は先天的にわれわれの心にそなわっていてそれが対象へ投入される」と考える観念論者だ、と。「物自体は知られない」とするのを不可知論だと決めつけ、「認識が實在の反映として発展することを否定しないが、認識の発展の最終原因を實在に求めることに反対し、ア・プリオリすなわち経験を超えたところに求めようとする」と論難します。三浦さんはそう裁断するので、認識というものをカントのやり方で理解することは退けられます。代わりに、唯物論的な認識論は「反映論」だとします。でも、認識は實在の反映でそれが発展進化するのだと言うだけで、人間の中で認識がどう進むかの議論はありません。

莊周 君は、三浦さんのカント理解に反論しようというのですか。カント以後のドイツの

哲学者たちは観念論者だと一般的に言われ、カントもそれに含まれることもあるのに、君はそれに反対する議論をしようというのですか。ずいぶん危険な問答にわたしを引きずり込むつもりですね、やれやれ。

園丁 僕の望んでいるのは哲学者の色分けではありません。重要なのは、彼らの認識がどこまで進んでいたかそこから何を受け取るかだ、と思います。カントは十八世紀後半に彼の哲学を築き上げたのですから、その議論の中に時代の知見に拘束されたものが混ざっているのはむしろ当然でしょう。カントを読んで、僕は三浦さんの判定に同意できません。『科学的発見の論理』を書いたK・ポパーは、自然科学を厳密な認識への営みと考えたのですが、物理学の認識が相対性理論や量子力学へ高まり、生物学の認識が遺伝情報を担うDNAの分子構造まで明らかにするほど進んでいた一九六〇年代に、カントの認識論が決定的なものだったと認定したのです。僕はこの判断を公正だと考えます。認識の過程が三浦さんの議論で説明されたと思えない僕は、自分なりに理解するために、カントの認識論までさかのぼって、人間がどう認識するのかを考えたいと思います。そのさい、カントの認識論を、現代にふさわしく唯物論的（実在する事物を対象とするという意味で）に解釈することにします。そうすれば、認識の仕組みについてももう少し具体的に考えることができるのではないかと思うのです。

莊周 それはやっぱり大胆な試みですよ。頼りない園丁と蝶にできますか？。それでもこの夢を続けるというなら、おつきあいしますがね。まあ、やってみてください。

園丁 『純粹理性批判』の緒言は、「我々の認識がすべて経験をもつて始まるということについては、いささかの疑いも存しない」という言葉が始まります。カントは、事実としての経験と、経験をもたらすモノが事実として存在することを疑っていない、と僕は思います。物自体という言葉がそれを傍証するし、「超越論的先験論的観念論者が経験的實在論者でありうる」という言葉も、カントが實在論者であることを証言します。それが直截的な言明にならないのは、ヨーロッパ哲学の伝統を引き受けて、しかも理論全体の完全性を目指しているからだと思います。開始した議論が最終的に無矛盾な体系を構成するようにすることは容易なことではありません。途上で厳密でない言い方が漏れ出ることを、カントといえども免れることはできないでしょう。また、断定的な言い方を慎むことになると思います。

莊周 君の言っていることは明瞭ではありません。カントは、ヨーロッパ哲学の諸説を單純に切り捨てないで克服するために、伝統の言葉を用済みにしないような論じ方をしているということでしょうか。カントが實在論者であることを否定しませんが、『純粹理

性批判』には、觀念論へと向かうような文章も多くあります。それらは、独断的であることを避けようとする文章だとばかりは言えないと思います。

園丁 うーん、それは……。しかし、ここで僕は、現代の知見に立つて、カントを唯物論的に解釈しようと試みているのです。カントは空間と時間の表象をア・プリオリなものとして議論を始めましたが、三浦さんのほめかすように觀念論的な觀念を認識論の出発点に据えたわけではありません。カントの議論は、ニュートンによる力学の建設に促されて始まったのです。ニュートン力学は人類が初めて科学と呼べるものに到達した金字塔です。当時として可能な限り完璧な体系で、人間の認識の極みでした。その認識を反省して、認識の仕方を、なんと言えよいのでしょうか、分析的・構造的に解き明かそうとしたのです。認識は経験をもつて始まるという人が、実在するものの示す現象を見事に記述する科学から空間と時間の概念をもつてきたのです。それを觀念論とするのは当たらないと思います。

莊周 たしかにそういういきさつです。しかし、ニュートン力学では、運動方程式の変数として登場するとしても、空間と時間は本質的に理論の前提とされています。それが、事物を記述する形式として空間と時間を抽出することを助けたのです。しかし、理論の

完全性を損なうようにも見え、そこに議論が介入する余地を残してもいます。

園丁 ここでアインシュタインの相対性理論に登場してもらえば、空間と時間は物理学の直接的な対象で、けっして単なる観念としてあるものではありません。現実には、人間の直感に人間に備わる感覚器官を通して得られるのです。感覚器官は実在していて、直感がとらえる空間と時間が感覚系の働きから知られるものだということは、「反映論」という言い方をしなくても、だれもが認めることでしょう。カントは、その直感の形式として空間と時間があると言っているだけで、唯物論と対立するものではありません。

莊周 君がアインシュタインをもちだしたのは、空間と時間が経験に先立つとするカントの立論に不都合ではありませんか。それに、カントは「空間と時間は対象そのものに付属するのではなく、主観に属する」と言いますよ。

園丁 あつ、そうでしたね。カントは、ニュートン力学が前提とする空間と時間がそれ自体で存立するという考え方を否定します。空間と時間の経験的実在性を主張しながら、同時に観念性も主張するのは、別の意味があるのだと思います。現代の科学からすると、空間と時間は、モノに必然的に随伴するものだし、経験と無関係ではありませんね。カントがそう考えたのは、空間と時間がモノに付随するとすれば、経験を除

き去つてもア・プリオリなものとして残るかが疑問になるからでしょう。カントはユークリッド幾何学をア・プリオリに必然的な学と考えていたので、空間が先験的な表象であるとする必要があつたのだと思います。

それでは、空間と時間を直感の先験的形式とすることは今ではふさわしくないでしょうか。必ずしもそうではありません。認識とは人間がこの世界を知ろうとすることです。それは外界に実在するものを知ろうとすることから始まります。そして、実在物は空間と時間において存在します。これが、現在人間の到達している認識からの結論です。したがって、認識を分析的に理解しようとするなら、やはり、空間と時間から始めるのが妥当だということになります。ところで、人間の認識は身心という実在物の働きによつて生じるのですが、その作用は相対性理論で記述しなくてもよいと考えられますから、人間が経験と同時に手にする空間と時間という直感の形式はニュートン力学的なものだとしてよいでしょう。ですから、認識論の第一章を空間と時間で始めて、出発点ではそれを先験的な形式としておくことは、現代でも妥当だと考ええます。認識が深まつたら再帰的に出発点に戻つて修正し、理論を無矛盾な体系に整えていけばよいのです。カントはその出発点に先験的感性論という表題を与えましたが、唯物論的なものと見なすことができます。

莊周 理の勝ちすぎる議論ですねえ。あの人は、まだ近代になりきっていない時代の制約にもかかわらず、もっと深くさまざまに考察したと思いますよ。ここまでの問答は不十分だと考えておくのがよいでしょう。

二〇一七年、一月

